

東京農業大学（2019年リーグ戦2部2位）

オホーツク海と網走湖に挟まれた網走市八坂の高台に広がる東京農業大生物産業学部のキャンパス。最高気温が27.2度を記録した8月28日、真夏の日差しを浴びたグラウンドを背に、アメリカンフットボール部のWR見崎良輔主将とQB高嶋雄也、RB比嘉匠の4年生3人が、悔しそうに隣の野球グラウンドを見つめた。張り切って練習を始める野球部員たちの姿に、見崎主将は「野球部だけが特例で練習再開が認められた。不公平ではないか」との思いがこみ上げ、練習再開がかなわずに秋季リーグの棄権に追い込まれたアメフト部の無念さを改めてかみしめた。

1989年の網走キャンパス開学とともに創部した東京農業大アメリカンフットボール部。95年から2000年、07年と通算7季を1部で戦い、95年は3位になった歴史を持つ。13年ぶりの1部復帰を目指して望んだ昨季の2部リーグは元高校球児のQB高嶋のパスが炸裂し、開幕から順当に3連勝。優勝を争う室蘭工業大との最終戦では、第3Qに8-7と逆転したが、直後に室蘭工業大に逆転TDを許し、結局8-15で惜敗した。今季は、その悔しさをぶつけるシーズンになるはずだった。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大で2月28日に道が緊急事態宣言、4月に国の非常事態宣言が出て、大学は全国3カ所のキャンパスを閉鎖。網走市内の学校体育館で練習していたアメフト部も活動を禁止された。その後は個人練習で活動解禁を待ったが、7月末に大学が、9月からの後期もリモート授業を継続し、課外活動の禁止延長を決めた。道内ではウイルス感染は沈静化しつつあるが、本部のある東京で感染が衰えないための判断だった。

見崎主将は「後期からの再開に期待していた。リーグ戦も当然参加するつもりだった」と振り返る。活動責任者と体調管理者がチームに常駐するとして7月から再開が認められた野球部の特例について大学に問い合わせたが、アメフト部の再開は認められなかった。近づくリーグ戦を前に、朝倉弘之監督と相談し、5人の4年生で話し合った末の苦渋の結論がリーグ戦の参加断念だった。8月25日に学連に棄権を申し出た。

見崎主将は「練習ができず、新入生の勧誘も出来ない。あと一カ月でリーグ戦に臨むのは準備不足で危険もある。それなら、後輩をしっかりと指導して、来年自分たちの分もやってもらおうと決めた」と言う。そして「悲しくて、悔しかった」と付け加えた。高嶋は「だれも悪くない。道内のほかの大学のアメフト部や、学内でも野球部が活動を再開しているのに、大学の対応は冷たすぎる」と憤る。比嘉は

「去年の室蘭工業大戦で、第4Qにゴール前3ヤードからダイブでボールを持ったが、TDできず、すごく悔しかった」と言う。

札幌での試合のときは、車に分乗し片道6時間かけて網走から通う苦労もある東京農業大のアメフト部員たち。愛知県から入学し、先輩に誘われてアメフト部に入った見崎主将は「コンタクトが怖かった時もあったが、3年間やって難しさの中のおもしろさも知った。室蘭工業大戦でラテラルパスを受け、20ヤード独走して終盤の追い上げにつなげたのが思い出」と懐かしんだ。高嶋は「野球はセンスが重要だったが、アメフトは反復練習でうまくなれるので、やりがいがあった。今年はQBとしてもっと数字を残せると思っていたのに」と残念がった。今年は休学し、来年は5年生選手になる比嘉は「今から後輩たちと準備をして、来年は同期の分の借りも返したい」と力を込めた。



【棄権の悔しさを胸に来季の「復活」を願う左から比嘉、見崎主将、高嶋】